

# MUSEUM

ミュージアム・アイズ

# EYES Mm MEIJI UNIVERSITY MUSEUM

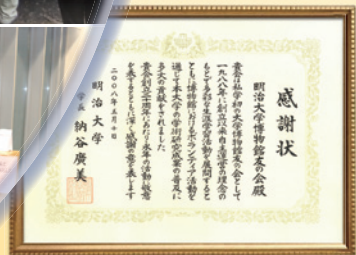
Vol. **70**  
2018



## 明治大学博物館友の会30周年

祝

30<sup>th</sup>



### Contents

- 展示&リサーチ — 明治大学図書館所蔵 エジプト学貴重書展
- 市民レクチャー — 工芸と生活と社会変革
- 学会研究室から — 黒曜石原産地における先史狩猟採集民の行動系(1)
- 博物館活動報告 — 館蔵古文書の整理作業  
公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.12  
鳥取県における民工芸振興策の刷新と実践 一手づくりのやきもの等を事例として—
- 収蔵室から — 仙台・埋木細工
- 南山大学協定通信/図書室から/博物館入館者数の動き/団体見学の記録/M2カタログ/博物館友の会から



# 明治大学博物館友の会 30周年

本年6月、明治大学博物館と二人三脚で歩んできた明治大学博物館友の会が30周年を迎えます。我が国における博物館友の会の始まりは1930年代と言われますが、近年になってその存在が新時代の博物館に欠かせないものとして注目されるようになりました。初期の友の会は博物館が広報活動の一環として組織していましたが、近年では博物館の運営をともにするパートナーとして位置付けられるようになってきました。

2001年に日本博物館協会は、文部科学省からの「博物館の望ましいあり方」についての委託調査の報告書の中で、「『知識社会』における新しい市民需要にこたえるため、『対話と連携』を運営の基礎に据え、市民とともに新しい価値を創造」する姿を、21世紀にふさわしい博物館像と定義しています。一部にはそれ以前から博物館における自主学習を組織する仕組みとして、また博物館の協力者として自主運営をおこなう新世代の市民団体が活動を始めていましたが、この頃から俄然注目を浴びることになったのです。実際、博物館におけるボランティア活動なども年々盛んになってきていますが、明治大学博物館の友の会はそのトップランナーと言える充実した活動を積み重ねています。

この博物館におけるコミュニティは、21世紀社会における新たなコミュニティとしても注目されています。20世紀以前における地縁、宗教、企業による既存共同体の衰退に代わる新たなモデルは、「価値」を軸に集まる同好の人々による重層的・複合的な様相を呈していますが、その一つの結集軸として博物館が、今、世界的に注目されています。今号ではその具体的実践をご紹介します。

## 明治大学博物館友の会 30年の足跡

### 明治大学考古学博物館友の会の発足

※発足時の会員数については諸説がある

1988

6/25 前年から始まった博物館公開講座「考古学ゼミナール」の第3回終了後、受講生有志が集まり「明治大学考古学博物館友の会」が発足 初代会長平吉平氏 会員数150名※ 9/12 友の会会報創刊号発行 「大宰府史跡発掘調査20周年記念特別展」(9/12～10/10) で会場案内・監視等のボランティアに従事 10/30 遺跡見学会スタート 第1回は虎塚古墳ほか茨城県の遺跡(参加42名)



第3回考古学ゼミナール

1989

4/15 「日本考古学1988」開催(参加135名) 前年の考古学を総括する講演会「日本考古学」がスタート 8/8・9 第2回遺跡見学会「大室古墳群と善光寺平の遺跡を訪ねて」開催(参加45名) 初の宿泊見学会となる

1991

9/14～18 韓国へ初の海外遺跡見学会(釜山・慶州他)開催(参加35名)

1992

3月 分科会「筒形銅器研究会」発起人会 5/30 第2代会長に土屋哲旺氏選出

1993

10/7～10 第2回海外遺跡見学会(韓国伽耶)

1994

3/19 古文書研究会(現古文書を読む会)発足 4/1 役員有志により図書室管理業務を始める この年会員数350名を超える

1995

4月 公募による考古学博物館図書室管理ボランティアが発足

1996

10/25,11/8 第20回考古学ゼミナール「考古学の未来を語る」の第2,4回「市民が語る考古学」で4名の会員が研究発表をおこなう この年会員数が400名に達する



図書室ボランティア

1997

11/15 展示解説員研修会が始まる(1998.3/7まで計9回)

1998

1月 会報正月号にて土屋会長が研究会結成を呼びかける 4/7 ボランティア解説員による展示解説スタート  
4/11 創立10周年記念式典・懇親会 5/9 第11回総会にて友の会シンボルマーク採用 9/11～13 10周年記念見学会「大和國中 飛鳥への旅」 10/31 10周年記念特別講演会(大塚初重名誉教授「前方後円墳研究の現状と課題」)開催  
11/11 「明治大学考古学博物館友の会創立10周年記念文集」刊行  
それまで名著出版「歴史手帖」に掲載していた「日本考古学」の講演録を友の会から刊行することになる

1999

## 刑事博物館・商品陳列館の自主学習サークル活動

- 1999.1/19 刑事博物館蔵の法制史料『官中秘策』の解説・筆写作業のボランティア活動をおこなう「資料を後世に伝える会」発足
- 2000.4/13 博物館入門講座受講者の有志による商品陳列館「工芸の会」前年秋以来の発起集会を経て発足

2000

- 3/31「弥生文化研究会」が発足
- 4/28「石器文化研究会」が発足
- 5/14第3代会長に藤野正治氏選出
- 江戸東京博物館で開催されたボランティアメッセ2003に参加

2004

- 4/1新校舎アカデミーコモンに新博物館開館 記念特別展「韓国スヤング遺跡と日本の旧石器時代」(4/1～5/31)の受付ボランティアを務める(以後、例年の特別展でボランティア活動)

## 明治大学博物館友の会としての出発

5/8刑事・商品・考古の3博物館が統合し明治大学博物館となったこととともない考古学博物館友の会と刑事・商品各館のボランティア・学習グループが合流し明治大学博物館友の会となる 資料を後世に伝える会は「平成内藤家文書研究会」に名称を変更、商品陳列館工芸の会とともに博物館友の会の分科会となった



展示解説ボランティア

2005

- 7/2国立歴史民俗博物館友の会・国立科学博物館友の会と共催で講演会「新しい弥生時代像を巡る」を開催
- 分科会「草生水の会」発足
- 12/17友の会分科会・会員の研究成果発表会がスタート(第1回は活動報告会)

2007

この年、友の会ホームページ開設

2008

- 5/10友の会発足20年を記念して納谷廣美明治大学長(当時)から感謝状が授与される
- 第4代会長に長野陽次氏選出 記念式典・記念講演会(大塚初重名誉教授「明治大学考古学の発展と友の会」)開催
- 記念誌「創立20年の歩み」刊行

- 7/18展示解説ボランティア発足10年を記念してボランティア勤続10年表彰が始まる
- 明治大学博物館友の会20周年記念展覧会「明治大学博物館友の会20年の歩み」(7/9～29)756名入場
- 10/17～19 20周年記念見学会「北陸の古代遺跡を訪れる」 11/10分科会「古文書の基礎を学ぶ会」発足
- 12/7地元会員案内による見学会開始 第1回は川越市

2009

インターネットによる行事受付、メールリストによる情報提供始まる

- 1/13玉里舟塚古墳埴輪復元・整理作業に会員が参加(～2010年8月) 組み上げた埴輪の数々は2010年度の特別展「王の埴輪」に展示された
- 文科省委託事業「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」の一環として大学が「明治大学博物館友の会ボランティア活動と自主学習」のDVDを制作

2011

- 4/21石器文化研究会が「旧石器・縄文文化研究会」へ名称を変更 5/14総会にて「日本考古学」講演録の刊行終了と講演会参加費無料・会報の増頁化を決定 7/29「東アジアの中の古代日本研究会」発足
- 東日本大震災被災地に義援金を送る この年、博物館友の会発足後の会員数として400名を超える

2012

5/12第5代会長に鈴木弘氏就任 11/9分科会「前方後円墳研究会」発足

2013

- 25周年記念連続古代史講演会(6/15,7/27,9/7,10/10の4回)会員数400名を回復、8月末日時点で434名 考古学博物館友の会時代1999年度の416名を超える新記録 9/19分科会「倭国から大和」を学ぶ会」発足
- 11/23結成25周年座談会 2～5代の会長が勢ぞろい、熊野正也顧問を交えて友の会活動のこれまでとこれからを語る
- 25周年のさまざまな企画の結果、この年会員数大幅増加

2014

7/17「古代東北アジアと日本研究会」発足

2015

- 3月 館蔵史料翻刻ボランティアとしてスタートした平成内藤家文書研究会が、結成以来取り組んでいた『官中秘策』33巻(江戸期法令集)の翻刻を終了
- 年末の時点で会員数500名を超える



フィールドワーク

2018

会報55号で分科会「飛鳥・藤原を学ぶ会」会員募集(4/18第1回例会開催予定)

### 【参考文献】

- ◆ 明治大学考古学博物館友の会「明治大学考古学博物館友の会会報」1～58号(1988～2004年)
- ◆ 明治大学考古学博物館友の会「明治大学考古学博物館友の会10年の歩み」(「明治大学考古学博物館友の会創立10周年記念文集」1998年)
- ◆ 明治大学博物館友の会「明治大学博物館友の会会報」臨時号、1～55号(2004～2018年)
- ◆ 明治大学博物館「明治大学博物館年報」2005年度～2016年度(2006～2017年)
- ◆ 「特集 新生明治大学博物館友の会」(『ミュージアム・アイズ』43 明治大学博物館、2006年)
- ◆ 「特集1 明治大学博物館友の会20年のあゆみ」(『ミュージアム・アイズ』50 明治大学博物館、2008年)
- ◆ 明治大学博物館友の会「創立20年の歩み」(2008年)



## 友の会の“ボランティア”と“分科会”活動



明治大学博物館友の会は、博物館から独立した組織として自主的な運営を行っている点で、全国の博物館友の会の中でも注目される存在です。その特色がよく表れているのが、博物館を支えるボランティアと自主的な会員の勉強会である「分科会」の積極的な活動です。

### ボランティア活動

常設展示室での展示解説と、博物館に併設されている図書室の受付を主に担当するボランティアです。図書室の利用者を含め、年間8万人にも及ぶ来館者に対して充実したサービスを提供するうえで、友の会のボランティアの存在はとても大きな力となっています。

#### ■ 展示解説員

博物館開館日のうち、火・木・金曜に常設展示室で来館者に展示解説を行っています。2017年度は45名が登録し、3～4名の当番制で、1名あたり月に2回ほど担当します。登録前に6日間の研修を受講し、商品・刑事・考古全部門の展示と明治大学博物館の活動について学び、約2ヶ月間の練習期間を経たのちに正式登録となります。

予約申し込みをした団体はもちろんのこと、当日訪れた団体や個人の来館者への解説にも対応しており、なかには、仕事の経験を生かして英語など外国語で解説できる解説員もいます。また、話すだけではなく土器のレプリカや古墳時代の冑かぶとのレプリカを使った「触る」学習や、土器の施文、石器（黒曜石）で紙を切るといった体験学習も実施しています。

こうした対話や来館者の関心を重視した丁寧な解説で、展示解説員への感謝をつづった感想が寄せられることがあります。ミュージアムショップの感想コーナーに一部を掲示しています。



ボランティアによる展示解説

#### ■ 図書室管理

博物館図書室には、約10万冊に及ぶ関連書籍が排架（配架）されています。通常、大学の図書館は一般に公開されていなかったり、利用が可能であっても紹介状など一定の手続きを必要とする館が大多数ですが、当館の図書室は、受付で氏名や所属、連絡先を記入するだけで誰でも利用できる開かれた図書室となっています。年間利用者は5,000名ほどですが、その入退室の受付や排架場所、利用の案内を友の会のボランティアが行っています。2017年度の登録は29名で、1日または半日単位で、月に1～2回担当します。講座の空き時間で参加したり、図書館や司書に関心がある方などもいます。業務中は読書も可能なので、静かな環境で書籍に親しみたい、という方も多いようです。

展示解説員と図書室管理ボランティアは、前身の考古学博物館時代の設立から数えて20年以上がたち、代表者のもとで担当ローテーションの決定や当番日誌による問題点の共有を行うなど、これまでの長い経験を生かして自主的に円滑な運営を実現しています。年限を特に定めていないため、10年以上にわたって活動しているベテランもいます。

このほか、特別展開催時に受付業務を行うボランティアや、博物館の調査研究計画に基づいて大規模な収蔵資料整理事業を行う際のボランティアを不定期で実施しています。こちらは、博物館が主体となって募集・実施しているものです。先の2017年度の特別展受付ボランティアでは、50名の友の会会員の皆さんに参加していただき、特別展の開催に大きく貢献していただきました。

## 分科会活動

会員有志による、テーマ別の学習サークルです。各10名～30名ほどのメンバーで構成され、毎月1回程度博物館教室に集まり、資料の研究やテキストの輪読と、それに基づく研究発表などといった勉強会を行い、会員の間で活発な議論が交わされます。そうした研究の成果は、毎年2月に開催される会員による研究発表会で分科会の枠を超えて友の会会員に公開されています。

また、分科会単位で外部の講師を招く小規模な講演会や、年に数回関東近郊やさらに遠方の関連遺跡・施設へのフィールドワークを独自に企画して実施しています。このフィールドワークを楽しみに参加される方も多いようです。

2018年3月現在で活動している分科会は、次の10の分科会です。4月から新たに「飛鳥・藤原を学ぶ会」が発足します。

- 古文書を読む会
- 工芸の会
- 弥生文化研究会
- 平成内藤家文書研究会
- 旧石器・縄文文化研究会
- 古文書の基礎を学ぶ会
- 東アジアの中の古代日本研究会
- 前方後円墳研究会
- 「倭国から大和」を学ぶ会
- 古代東北アジアと日本研究会



分科会のフィールドワーク（2017年前方後円墳研究会）



博物館教室での研究会（2018年平成内藤家文書研究会）

ボランティア・分科会活動について詳しく知りたい方は、明治大学博物館の友の会ホームページをご覧ください。

<http://www.meiji.ac.jp/museum/company/tomonokai.html>

### 明治大学博物館と友の会活動

明治大学博物館友の会 会長 鈴木 弘

明治大学博物館友の会は、「博物館開設の趣旨に賛同し、会員による自主運営により、会員相互の知識と親睦を深め、博物館活動に寄与すること」を目的としています。

今年度は、わが友の会創立30周年という節目の年を迎えます。更に、博物館の日常に密着した「ボランティア活動」を通じ、博物館活動に貢献していきたいと思えます。

明治大学博物館並びに諸先輩のご支援により会員数も過去最高の573名（2017年12月末）となりました。我々友の会にとって明治大学博物館の全面的な協力を頂いて、特に、講演会・分科会会場等の利用、講演会・見学会・分科会活動においても、その恩恵により、お忙しく高名な講師をお呼びできるという特典を享受していることを忘れないようにしたいと思います。5年ほど前から、各種行事の体系化を図り、外部の方々の参加を頂く等成果をあげてきています。今後も、生涯学習の機会を提供できるよう努力するつもりです。



# 明治大学図書館所蔵 エジプト学貴重書展

佐々木 憲一 (明治大学文学部教授)

馬場 匡浩 (早稲田大学高等研究所准教授)

根岸 愛 (明治大学文学部生)

2017年6月3日から27日にかけて大学博物館特別展示室全室をお借りして、標記の企画展を開催した。この企画展は佐々木が中心となつて、エジプト学者の馬場匡浩の監修を仰ぎ、根岸愛の協力を受けて進めたものである。25日間の会期中に2590名もの人が見学を訪れ、6月14日には馬場が展示解説を行い、これまた多数の皆さんに来ていただいた。

今回の企画展にあたっては、山泉進明治大学図書館長、村上一博明治大学博物館長の格別のご高配を賜り、また博物館学芸員の忽那敬三氏には準備の段階から大変ご苦労いただいた。心から御礼申し上げたい。

今回展示したのは、ナポレオン1世のエジプト侵攻(1798-9)に参加したフランス人研究者たちによる『エジプト誌：フランス軍の遠征中にエジプトで行った観察と研究の集成 *Description de l'Égypte, ou Recueil des Observations et des Recherches qui ont été faites en Égypte pendant l'expédition de l'Armée Française*』初版(1809-22)の内、古代篇図版5冊とエレファント判図版3冊、ヒエログリフ解読に成功したジャン＝フランソワ＝シャンポリオン Jean Francois Champollion 自身に

よるエジプト遠征の報告書『エジプトとヌビアの記念物 *Monuments de l'Égypte et de la Nubie*』全4冊(以下『記念物』)、シャンポリオンがヒエログリフ解読の成果をフランス学士院で2回目に報告したときの配布資料『デュルプス氏への書簡 *Lettres a M. le duc de Blacas d'Aulps*』全3冊、ベルリン大学エジプト学初代教授レプシウス Carl Richard Lepsius(1811-84)によるエジプト遠征の報告書『エジプトとエチオピアのモニュメント *Denkmäler aus Ägypten und Äthiopien*』(以下『モニュメント』)初版12巻のうち、第1～10巻である。

これらのなかで、『エジプト誌』とレプシウス『モニュメント』第3～8巻は2006年2月に特別展示室半室で展示したことがあったが、シャンポリオン『記念物』とレプシウスの第1, 2, 9, 10巻は本学初公開の資料である。

企画展では、フルカラーのページを中心に、広げたページを会期中中で変えて、数多くのページを展示した(図2)。そのなかで、佐々木が興味深いと思うページを図と共に解説する。特に、同じ遺跡を違う研究者がどのように描いたかという点に留意したい。なお、エジプトの主要な遺跡は図1に示した。

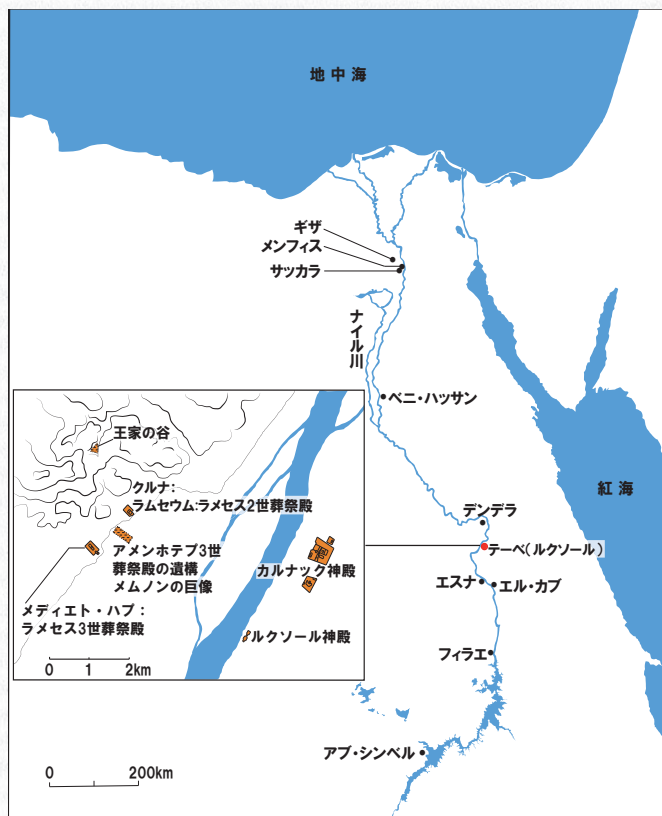


図1 古代エジプト地図

## カルナック神殿

カルナック神殿はテーベの東岸に1km以上の敷地を有するエジプト最大の神殿複合体で、中央に位置するアメン神殿域、北側のメンチュ神殿域、南側のムウト神殿域からなる。カルナック神殿で最も有名なのは、両側に石の林を作っている122本の円柱を擁する多柱廊広間である。またカルナック神殿は、『エジプト誌』の古代篇の中で最も多くのスペースを割いており、その第3巻 図版34(図3)ではその多柱廊広間と、中央部の主側廊となっている12本のパピルス型円柱を描いている。この画は画家によって再構成されたファラオ存命期の神殿内部の様子が描かれている。ナポレオンの遠征軍が訪れたころの神殿は、数度の地震によって柱は倒れ、屋根が落ち、荒廃状態にあったという。レプシウス『モニュメント』第2巻の図版77(図4)もカルナック神殿の大列柱室を描いているが、これは1850年代のレプシウス調査時の姿である。

## ギザ

下エジプトで最も有名なのは、カイロから西へ13kmに位置するギザのピラミッド群である。ギザというのは台地の名である。



## アブ・シンベル神殿

ナポレオンの遠征当時はシャンポリオンによるヒエログリフ解読以前であり、どのファラオがどのピラミッドを造ったかも確定できていなかった。『エジプト誌』古代篇第5巻 図版16(図5)の鳥瞰図ではクフ・カフラー・メンカウラーのピラミッドにそれぞれ、大ピラミッドGRANDE PYRAMIDE、第二ピラミッド2' PYRAMIDE、第三ピラミッド3' PYRAMIDEと名称がつけられている。ピラミッドやスフィンクスのことは、既に17,18世紀の旅行者によって紹介されていたが、正確な調査や測量を行ったのはナポレオン軍の学者が初めてであった。このギザ墳墓地区の地図はこの地区最初の地図であると同時に、鳥瞰図という形態も当時珍しいものであった。

それに対し、レブシウスがエジプト遠征を行ったのはシャンポリオンによるヒエログリフ解読後であり、『モニュメント』第1巻図版14(図6)の鳥瞰図では、「三大ピラミッド」が第4王朝のクフ・カフラー・メンカウラー3名のファラオの墓であることが同定されている。因みに、ページ上部(横向き)の図のため右側が北を示し、北の最も大きなピラミッドがクフ王のもの、中央のピラミッドがカフラー王のもの、南の一番小さなものがメンカウラー王のものである。カフラー王とメンカウラー王の横に並ぶ小型のピラミッドは王妃のピラミッドである。スフィンクスはカフラー王のピラミッドの東方約500mに位置している。9基のピラミッドはもちろんのこと、付属の葬祭神殿、河岸神殿、スフィンクス、第4,5王朝の貴族の墓地群がどのように分布しているのかがよくわかり、ナポレオン『エジプト誌』と比べると、より多くの遺構が明らかになったことがうかがえる。

アブ・シンベル神殿は、エジプト最南端のアスワンから南へおよそ280kmにあるヌビアの地に第19王朝のラムセス2世によって建てられた、大小2つの岩窟神殿である。この神殿はアスワン・ハイダム建設に伴い水没の危機に晒され、1968年に移築されていることから、次のレブシウスやシャンポリオンの報告書は移動前の様子を描いているので、大変貴重である。

シャンポリオン『記念物』第1巻の図版13(図7)はイタリアのエジプト学者イッポリト・ロゼリーニ Ippolito Rosellini(1800-43)が描いたもので、カデシュの戦いでラムセス2世を描いている。一見この戦いで強靱な指導者として描写されているが、難戦を強いられたことを記述している。

レブシウス『モニュメント』第7巻図版190(図8)はアブ・シンベル神殿内の像を描いている。図の右の4像は神殿最奥の至聖所に座するもので、左からプタハ神、アメン神、神格化されたラムセス2世、ラー神である。



図2 会場の様子

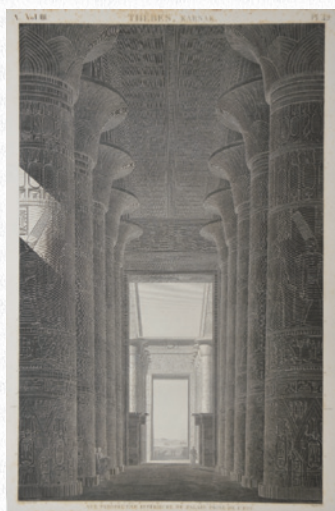


図3 カルナック神殿



図5 ギザのピラミッド



図6 ギザのピラミッド



図4 カルナック神殿

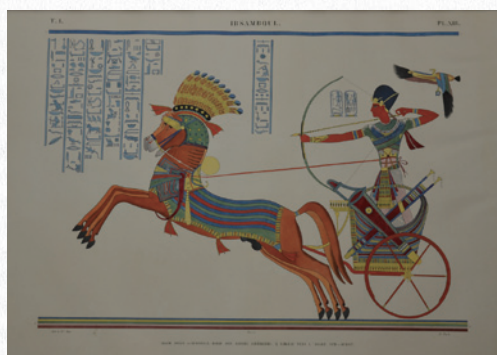


図7 アブ・シンベル神殿



図8 アブ・シンベル神殿

# 工芸と生活と社会変革

鞍田 崇 (明治大学理工学部准教授)

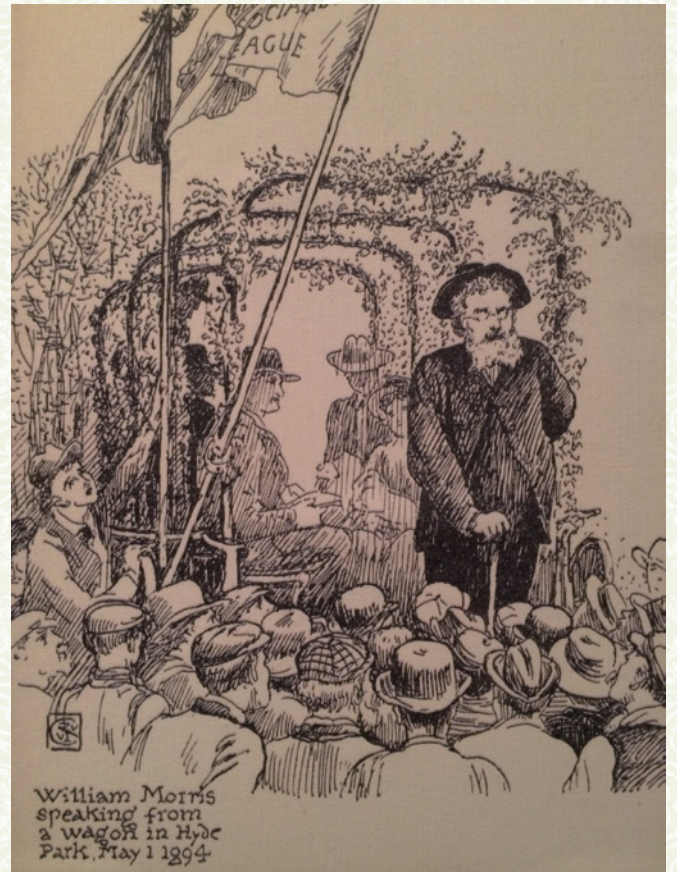
先年、ロンドン郊外にあるウィリアム・モリス・ギャラリーを訪ねた際に、一枚の caricature に目がとまった。描かれているのはアーツ・アンド・クラフツ運動のリーダー、ウィリアム・モリス (1834~1896) その人である。 Hyde Park で演説する様子を描いたもので、演台として設けられた貨車の上で杖をつき聴衆に対峙している。1894年と注記があるから亡くなる2年前。晩年のモリスである。見れば、トレードマークの顎髭も白髪のようなのである。

この caricature はモリスと親交のあった画家のウォルター・クレインの手になる一枚で、後日調べたら、クレインの著書『回顧録』にも収められており演説当日の様子についての叙述もある (Walter Crane, *An Artist's Reminiscences*, 1907, pp.440-441)。演説はメーデーに際してのものだったらしい。季節柄か演台の貨車は春の野花で飾られている。群れ集った人々は労働者たち。貨車の手すりに結わえられた竿の先、モリスの頭上にたなびくのは赤旗だったようだ。 caricature には彩色が施されていないけれども、たしかに旗の一つには「SOCIALIST」とか「LEAGUE」といった文字がある。クレインは言う。モリスはただいたずらに過去の美の世界に耽溺したわけではなく、将来に対する明確なビジョンを有していた、と。ビジョンとはアートを通じた社会主義の実現であった。アートというのはもちろん狭義の芸術にとどまらず、クラフトすなわち工芸を含むものにほかならない。

なぜこれが目にとまったか。

モリスの関心が社会主義にあったことがあらためて印象づけられたからである。そうして、(社会主義とまでは言わないまでも) 社会変革という視点がいま工芸を考える上でも求められているのではないかと考えたからである。

モリスによる工芸への関心が社会変革の追求と連動していたことは周知のことではある。秀逸な歴史研究



ウォルター・クレインによるウィリアム・モリスの caricature (部分)

を重ねてきたデザイン史フォーラムの編になる『アーツ・アンド・クラフツと日本』(藤田治彦責任編集、思文閣出版、2004)は5部構成からなり、そのうちのひとつを「社会改革」としている。けれども、あらためてこの点を強調しておく必要があるのではないかと思う。というのは、専門家の議論はひとまずおくとして、昨今のモリスの取り上げられ方といえば、もっぱら工芸や建築、それらのデザインの刷新に尽力した側面ばかりが目立っているからだ。たとえば、モリスは「実に多彩な理想」を掲げたと言われるものの、その内実は「失われた手仕事の良さを見直し、自然や伝統に美を再発見し、シンプルで美しいライフスタイルを提案するなど」という範囲内に留められてしまう。いま引用したのはヴィクト



リア&アルバート美術館の『International Arts and Crafts』展(2005)をベースにしたものとして話題を呼んだ『生活と芸術—アーツ&クラフツ』展の主催者挨拶文からだ(同展図録、朝日新聞社、2008-2009、4頁)、この展覧会タイトルは、モリスに寄せられる昨今の関心(少なくとも我が国におけるそれ)が有する視野を示すものとしても象徴的だ。そこに生活はあるが社会はない。

かつては違った。モリスといえば、まずは社会思想家であった(であればこそ、逆に美術工芸の文脈ではじめて彼を取り上げた富本憲吉の見識が評価される)。日本版アーツ・アンド・クラフツともいべき民藝から見たモリスもまたそうである。

民藝運動の主導者であった柳宗悦(1889~1961)に「工藝美論の先駆者に就て」という一文がある。主著『工藝の道』の本編末尾に収録されている。執筆は昭和2年(1927)。独自の「工藝美」を表す用語としての「民藝」という言葉の創出(刊行物での初出は1926年)からほどなくしての文章である。そこで彼は「先駆者」の一つとして「ラスキン・モリスの思想」を掲げ、まず次のように注記している。

私がラスキンやモリスを熟知するに至つたのは實に最近の事に屬する。近時出版された大熊信行氏の好著「社會思想家としてのラスキンとモリス」が、兩思想家に對する私の注意を一層新にせしめた事を、感謝を以て茲に銘記したい(柳宗悦『工藝の道』、ぐろりあそさえて、1928、275頁)

柳にとってモリスはその師ジョン・ラスキンともども社会思想家であった。いや、「社会改革者」であった。

モリスは幸にもラスキンの結論を彼の序論として進んだ。彼は直ちに社會改革者としての任務を双肩に負ふた。工藝家としての彼が改革者となつたのではない、改革者たる彼が工藝に於て其信念を表示しようとしたのである。(前掲書、279頁：傍点引用者)

モリスをそのように位置づけた民藝自身が、ではどういふ社会変革をなしたのか。またその成果の現代的

意義はいかなるものであるのか。それはそれでそれぞれテーマではある(関心のある方は、『アーツ・アンド・クラフツと日本』所収の中見真理「ギルド社会主義と日本—柳宗悦による受容を中心として—」を参照されたい)。だが、さらに重要なことは、かつてこのように社会変革と関連づけて論じられたように、現代社会における工芸文化の可能性を問い直すことではないだろうか。

生活はあるが社会はない。これは、モリスの取り上げられ方に限った話ではない。近年一般に手仕事や工芸に対する再評価と共感が広がりつつあるが、そこでもまた同様の事態が見受けられる。デザインの文脈からは論じられても、社会変革との関連で語られることはまずない。もちろん再評価や共感の広がりそのものは決して悪いことではない。ただ、それを受けとめ深めていくうえで、近代社会における工芸文化の役割を社会変革という視点から問うたモリス、さらには民藝の姿勢を参照すべきではないかと思うのである。

あえて単純化して言うなら、生活と社会をブリッジするものとしての工芸。いま問われているのはそれである。ではそれはどういふ工芸か。拙著『民藝のインテリマシー』(明治大学出版会、2015)はそうした視点から民藝を論じたものであるが、別のところで僕はこんな風に書いたことがある。

正しさでは人は動かない。人をして、おのずと次の一步を踏み出させるのは、正しさではない。美しさである。あるいは、心地よさ。「素敵だな」とか、「かっこいいな」でもいいかもしれない。少なくとも、心が揺さぶられないと、人は動かない。アタマで理解しただけでは、人は動かない。そうして、おうおうにして正しさは、アタマのなかだけで終始しがちである。

(鞍田崇「茶の湯と民藝 四」、『なごみ』436号、淡交社、2016、97頁)

社会変革などといったからといって、工芸は「正しさ」という拳を振り上げるわけではない。工芸は革命を起こすわけではない。工芸ならではの生活に根差した美しさを追求することが、人々をして一步踏み出させる。大事なのはそこである。たとえ緩慢なものだとしても、その一步は確実に社会につながる。そうした緩やかな、工芸的な社会改革がいま求められていると思うのである。

# 黒曜石原産地における 先史狩猟採集民の行動系(1)

島田 和高 (考古部門学芸員)

## 1. 黒曜石原産地の黒曜石遺物を原産地分析する?

1970年代初頭からはじめられた黒曜石産地分析により、中部・関東地方の後期旧石器時代遺跡から出土した10万点以上の黒曜石遺物の分析結果が得られている。これら膨大な原産地分析をもとに、中部・関東地方に広がる黒曜石原産地と居住地を往還する、いわばマクロ地域的な旧石器原産地利用の行動系の研究が進められてきた(Shimada et al., 2017ほか)。

しかしながら、後期旧石器時代全体の長期間にわたる黒曜石利用の動態解析にはマクロ地域的視野は好適だが、原産地で繰り広げられたマイクロなヒトの行動とその成り立ちをもっと細やかに復元するためには、この視野は少しばかり解像度が粗く、なかなかヒト(考古学的な意味で)が見えてこない。とはいうものの、マクロ地域的な黒曜石利用の研究に比較して、例えば、図Aに示したような中部高地黒曜石原産地という限られた箱庭的エリアの内側で、数あるそれぞれの原産地が具体的にどのように利用されたのか、実はこれまでほとんど明らかにされてこなかった。これには、大きく3つの理由がある。

1) 原産地遺跡=大規模石器工場というイメージが根強く、原産地でのヒトの行動系は石器製作に特化しており、その結果、遠隔地域への石器の搬出を目的とした石器製作址が形成される、という図式的な理解が優勢であった。近年、大規模遺跡とは異なる性格の遺跡も見つかっている。

2) したがって、原産地遺跡で石器原料に供された黒曜石は、その遺跡に直近の原産地に由来するだろうという先入観があった。

本当にそうなのか、確かめる必要がある。

3) その結果、これまでに幾つかの原産地分析例はあるが、原産地の中でのヒトの動きを復元する「原産地石器群の黒曜石原産地分析」とその結果を考古学データに統合する作業は、意識的には行われてこなかった。

これらの課題を認識したうえで、原産地遺跡出土の黒曜石遺物を徹底的に産地分析することにより、原産地としてある一定の分布の広がりを示す個別の原産地のどこを、どれだけ、どのように利用したのかを解明することは、黒曜石獲得の際に利用した現地の細かい経路やその利用の頻度、そして原産地から遠隔地への連絡経路などを包括したヒトの原産地行動系の復元につながると考えられる。

そこで本号と次号の紙幅をお借りし、中部高地黒曜石原産地の一角に位置する広原(ひろっぱら)II遺跡出土石器の産地分析結果を石器群データに統合し、その結果を考古学的に解析して、今から35,000年前を前後する後期旧石器時代前半期におけるヒトの原産地行動系の一端を解明していきたい。

本号では、具体的な分析結果を紹介する準備体操として、広原II遺跡の概要、中部高地原産地と産地分析の現状、そのほかの分析方法などについて紹介する。

## 2. 広原II遺跡の概要と原産地分析

図Bに示すように、広原II遺跡は和田川の右岸に形成された広原湿原をとりまく遺跡の一つで、明治大学黒曜石研究センターにより2011~13年度に発掘調査が行われた。同時に広原I遺跡の発掘

と湿原堆積物のボーリングによる過去3万年間の古環境復元も行われた(小野ほか2016)。発掘の結果、縄文早期の遺物群と後期旧石器時代前半期の石器群(以後、4層石器群と呼称)が出土した。

合計2,940点の黒曜石遺物が産地分析されたが、それはどのように行われたのか。まずは、黒曜石遺物の分析結果を対照するための原石露頭(地質黒曜石)の分布を捉え、元素組成による分類を行う必要がある。図Aに示したのは、島根大の及川穰さんと長崎大の隅田祥光さんらによる、蛍光X線分析を用いた元素分析(定量分析)にもとづく地質黒曜石の判別グループの分布である。図Aを見てお分かりのように、全ての原産地のそれぞれが固有の元素組成を持つ、というわけではない。HH(星ヶ塔・星ヶ台)のように、比較的近いものどうしで判別グループがまとまるケースもあるが、それでも結構広い範囲に分布している。つまり、ある黒曜石遺物がHHと判別されても実は露頭は特定できず、だいたいの辺りという近似的なものになる。もっと困ったことに、同じ火砕流に由来するなどの複雑な理由から、遠く離れた原産地が同じ判別グループにまとまるケースがある。MT(東餅屋・鷹山)が典型で、もし黒曜石遺物でMTが判別されたとしても、ヒトの動きとして東餅屋か鷹山か、どちらから持ち込まれたのか大変悩むことになる。

さらに、鹿児島大の吉田明弘さんが広原湿原の堆積物から明らかにしたように、図Aの一带は旧石器時代には森林のない高山帯景観であり、岩石生産、地形の侵食などで露頭の地形も現在とは異なると考えられる。また、完新世以降の土壌がそれらを覆っているという履歴をたどっている。した

がって、原産地分析に用いられる地質黒曜石のデータベース（図A）は、あくまで現在の地表近くの原石分布を代表しているので、先史時代に実際に利用された産地（先史原産地）であるとは限らない。

正直、このマイクロ地域的視野においては、原産地分析結果をそのまま「ここが旧石器時代人の黒曜石獲得場所である」、と声高にいうことはできない。絶望する前に、もう少し前向きな方策を考えよう。

### 3. 原石と石器の礫面から分かること

原産地の遺跡から出土する黒曜石遺物には礫面が残されることが多い。元野尻湖博物館の中村由克さんは、広原湿原が流れ込む和田川河床の黒曜石原石の礫面を調べた。その結果、上流域では地表で擦

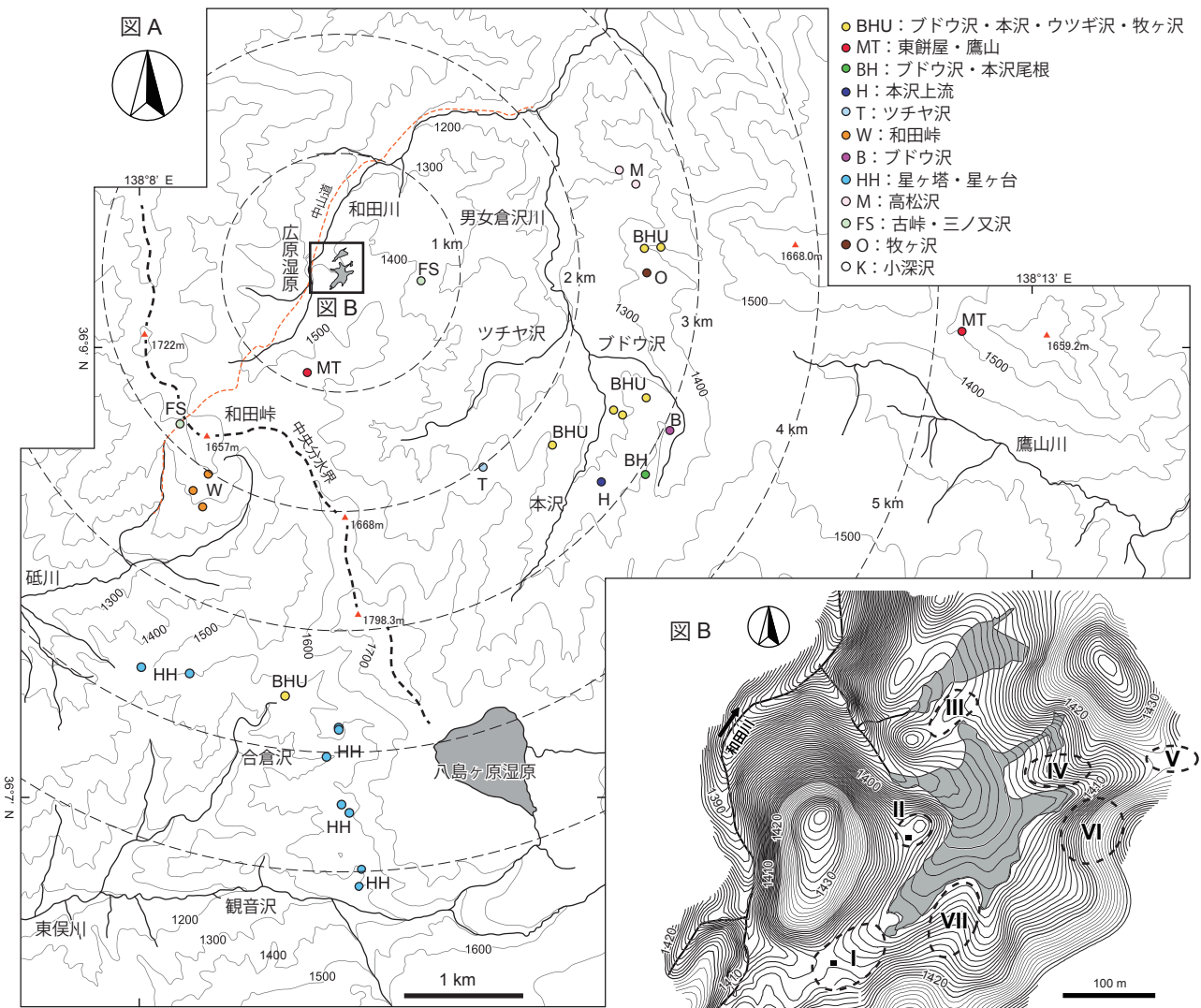
れた痕跡が目立つ垂角礫が、中流では表面に新鮮な衝撃痕が一面に残される水磨された垂角礫が、そしてもっとも下流の男女倉沢川との合流付近から下流は円礫となり、衝撃痕も水磨され滑らかな表面となることを明らかにした。図Aに示すように和田川は中央分水界の北側にあるので、少なくともMT（東餅屋・鷹山）の黒曜石が供給されている。仮に広原IIからMTが判別され、その石器の礫面を分類して中村さんのインデックスに対照すれば、MT黒曜石の採取場所がかなり詳しく推定できるだろう。もちろんMTの相互に遠くはなれた東餅屋と鷹山の区別の問題は残るが。また、遺物の礫面に水磨の痕跡がなく新鮮な面をもった角礫があれば、これらは露頭付近の地表に分布していたと判断できる。MTだけでなく、他の判別グループの黒曜石遺物の礫面分類でも地表採取なのか、

河川採取なのかの区別が可能である。

次号では、広原II 4層石器群に原産地分析と礫面分類ほかの方法を用いて、広原IIの形成を含む、今から35,000年前前後のヒト行動系を復元する。（つづく）

#### 【参考文献】

- ◆小野昭・島田和高・橋詰潤・吉田明弘・公文富士夫編 2016『長野県中部高地における先史時代人類誌：広原遺跡群第1次～第3次調査報告書』
- ◆Shimada, K., Yoshida, A., Hashizume J., and Ono, A. 2017 Human responses to climate change on obsidian source exploitation during the Upper Paleolithic in the Central Highlands, central Japan. *Quaternary International* 442
- ◆土屋美穂・隅田祥光 2018「広原I 遺跡・II 遺跡から出土の黒曜石製石器の原産地解析：判別プログラムの修正と判別結果」『資源環境と人類』8



長野県中部高地における蛍光X線分析による原産地の判別グループ（元素組成グループ）の分布と広原遺跡群

図A：判別グループの区分と原石試料採取地点の分布（色塗り円）は土屋・隅田（2018）による。プライマリー原産地状の地点（原地性原産地）のみを示した。破線円は広原湿原（遺跡群）からの直線距離を表す。コンターの間隔は100 m。赤三角は主な山頂。

図B：広原湿原と周辺の遺跡分布。I～VIIは遺跡。2011～2013年度発掘地点は、I遺跡とII遺跡（黒四角は発掘区的位置）。小野ほか（2016）より作成。

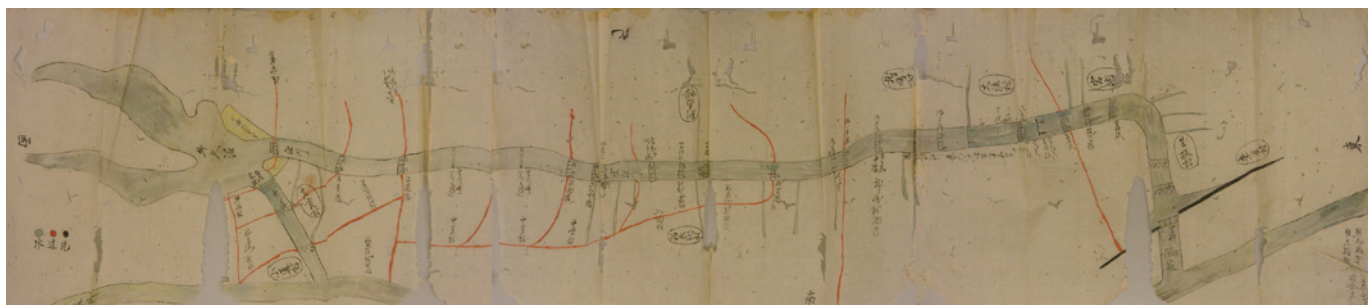
## 館蔵古文書の整理作業

刑事部門は、古い時代に書かれた様々な記録—古文書を多数収蔵しています。古文書はくずし字で書かれているため、見ただけではすぐには何が書かれているか分かりません。そのため、古文書を収蔵する博物館や文書館では、古文書を一点ずつ読み、何年に、誰が作ったものでどういった内容のものなのか、という事をリストにしていきます。これを古文書整理と言います。くずし字で書かれている古い記録を一点、一点、読んでいかなければならないので、整理には手間と時間がかかります。博物館や文書館に収蔵されている古文書は、こういった整理を経て、一般に公開されていきます。



当館では、2016年から2017年にかけて、文学部准教授野尻泰弘先生、文学部兼任講師牛米努先生と共に、文学部日本史専攻の学生・院生が参加する古文書整理を行いました。この調査は、2年間で21回実施し、のべ100名の学生・院生が参加しました。

古文書の整理はくずし字の読解能力を必要とするので、くずし字を勉強し始めたばかりの学生は、先輩や先生のアドバイスを受けて学びながら古文書整理をしていきます。また、難しい文字が出てくると、ああでもない、こうでもない、と皆で額を寄せ合い、辞書を引ながら、読んでいきます。整理した文書の一つ、常陸国河内郡宮瀨村文書（現・茨城県龍ヶ崎市）は、江戸時代の水利関係の記録を多く含んでいたため、縮尺2万5千分1の地図で地形や水利を調べ読み進めて行きました。学生・院生にとっては、実物の古文書をテキストに、くずし字解読の経験を積んでいく機会でもありました。



### 公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.12

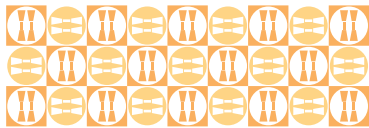
## 鳥取県における民工芸振興策の刷新と実践 — 一手づくりのやきもの等を事例として —

商学部の先生方と共同で伝統陶磁器産業に関わる調査・研究をおこない、その成果報告会として、例年、他研究科・学部の院生・学生や一般社会人にも門戸を開いた公開特別講義を開催しています。2016年度からの3ヶ年は山陰地方の陶器をテーマに製造・流通・販売に関する調査・研究が進行中です。本年度の講義は鳥取県にスポットをあて、去る2017年11月10日、鳥取県商工労働部市場開拓局販路拡大・輸出促進課民工芸振興官の大江啓司氏をお招きし、県による民工芸振興策の転換とその特色についてご講演をいただき、メーカーに対する振興策や販路開拓をテーマとするディスカッションをおこないました。

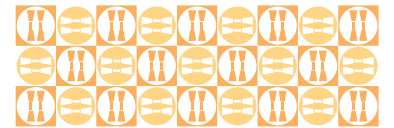


鳥取県にはまとまった数のメーカーの集中による産地形成こそありませんが、多様性に富んだ窯が各所に分布しています。また、新窯焼成や地元の素材を用いるなど古式製法の継承も顕著です。個々のメーカーによって事情が異なるため、作り手側から講師を招聘することが難しかったのですが、県全体の動向を俯瞰するお立場からお話をいただくことができました。鳥取県では、2000年代に入る頃から基本政策として「地域の自立」が掲げられ、その流れの中で民工芸の振興策も補助金交付中心の考え方を修正し、消費者・消費地に対するプロモーションによって作り手をサポートする戦略を採用するようになりました。そこでは、すでにあるものの「見せ方」を変えてみる発想から、アパレルブランドやセレクトショップという、従来の民芸店・百貨店とは違うチャネルに対し積極的なアプローチがなされたこと、そうした取引先からのフィードバックを商品開発に生かしてゆくこと、観光や食との組み合わせで情報発信をすることなど、興味深いお話を伺うことができました。

※この講義の抄録は『明治大学博物館研究報告』23号（2018年3月31日刊行予定）に収録されます



うもれぎざいく  
 仙台・埋木細工



江戸時代後半の仙台藩で始まった“埋木”を利用した工芸品を埋木細工という。木目を生かした美しい細工と、重厚感のある艶が独特な工芸品で、1982年には宮城県知事指定伝統的工芸品にも指定された。現在も宮城県仙台市において作り続けられている、この全国的に見ても珍しい材料を使用した埋木細工の歴史と現状についてご紹介しよう。

まず、埋木とは、「一般に、生育途中で土中や水中に埋没し、長期間埋もれていたにもかかわらず、完全に腐朽することなく、また、珪化による化石化には至らずに掘り出された樹木」(成田廣枝2016)のことをいう。仙台で採掘された埋木の場合、約500万年もの間地中に埋没する中で圧縮され、地熱によって炭化したものである。

仙台の埋木は江戸時代後半に山下周吉という仙台藩の下級藩士が、仙台城周辺で偶然発見したことから知られるようになり、細工作りは下級藩士の中での内職として広がりを見せた。しかし当時はその範囲にとどまり、積極的に埋木が採掘されるようになったのは、明治期以降とみられる。最盛期は明治中頃から大正、昭和にかけてだが、埋木の歴史および最盛期を語るうえで忘れてはいけないのが“亜炭”の存在である。亜炭とは、炭化程度の低い石炭の一種であり、明治・大正期には風呂焚き等で利用され、特に太平洋戦争中は石炭の代替燃料として重宝された。宮城県内は仙台以外でも採掘がされたようだが、仙台市内では主に青葉山・八木山一帯で採掘が行われていた。埋木は亜炭の副産物であったために、亜炭の採掘量が増えるにしたがって増えたとみられる。さらに明治以降家内工業として行われていた埋木細工の生産者たちが、埋木細工の生産の革新を目指して組合を結成したことや、職人が増えたことが最盛

期を迎えることに繋がった。

こうして一時期盛り上がりを見せた埋木細工だったが、高度経済成長の訪れにより転機を迎える。1960年代にそれまで主流であった石炭から石油へと燃料転換が進むと、石炭と共に燃料として使用されていた亜炭も採掘を終了し、姿を消すこととなった。亜炭の副産物であった埋木も自動的に採掘が停止し、材料がなくなったことで埋木細工の職人も減少の一途をたどることとなったのである。

現在埋木細工を製作しているのは、小竹 孝氏と弟子の女性の2人である。また、材料の埋木も小竹氏の父親が生前貯蔵していたものを使用し、年々数を減らしているため、埋木細工は製作の終わりが見えている。しかし、小竹氏は日本経済新聞紙上のインタビューにおいて、

20代の女性が弟子入りした。材料が尽きてしまっても、語り部として後世に埋もれ木細工を伝えてくれると思うと心強い。太古の埋もれ木だからこそ持つ存在感や重厚感の魅力を、もっとたくさんの人に知ってもらいたい(『日本経済新聞』2017.9.1朝刊)

と述べた。

長く作られてきた工芸品の生産終了は珍しい話ではない。産業としてというよりは、“保存”のための製作に移行しているような産地も見受けられるのが現状である。少しでも長く作り続けられて欲しいというのが人間の感情ではあるのかも知れない。しかし、むやみに作り続けようとするばかりでなく、工芸品が作られてきた背景や工程などの情報を残す方向に進むのもまた重要なことではないだろうか。

(林田 真由子)



埋木細工・鷹 1957年収集



埋木細工・端書入 1958年収集

【主要参考文献】

- 成田廣枝『埋木の特性—有機地球素材への展望—』(生物資源シリーズ3)八十一出版2016
- 石垣博『仙台埋木細工の由来』石垣博1971
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編7 近代2』仙台市2009
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別篇3 美術工芸』仙台市1996
- 相原陽三『埋木細工』『宮城県の昭和史：近代百年の記録 上』毎日新聞社1983
- 日本経済新聞『「埋もれ木細工」最後の職人—500万年前の炭化木材、炭坑の廃坑で現存数僅かに、小竹孝』2017年9月1日付朝刊

## シンポジウム「ハンズ・オンの可能性を考える」を開催しました

明治大学博物館と南山大学人類学博物館による協定事業の一環として、11月27日(月)に学術シンポジウムを開催しました。今回は、1990年代後半から日本で普及した、実物やレプリカなどに実際に触れて学ぶ展示・教育手法である「ハンズ・オン」について、その傾向や問題点、今後の可能性について考えることをテーマに据えました。日本での本格的な導入から20年以上がたちますが、2016年12月には南山大学人類学博物館で「ハンズオン展示再考とその展開」(全日本博物館学会・日本展示学会主催)が開催されるなど、ハンズ・オンという手法について改めてその効果に関心が高まっています。

今回のシンポジウムでは、第1部では歴史系博物館(当館)、科学系博物館(国立科学博物館)、民家園(川崎市立日本民家園)というさまざまな分野の館園におけるハンズ・オンの実践状況が紹介され、第2部では3名の研究者によって海外や日本におけるハンズ・オン導入期からこれまでの状況、また触る展示の今後の可能性についての議論が報告されました。第3部では矢島國雄明治大学教授(学芸員養成課程)の司会で報告者による討論が行われ、ハンズ・オンのさらなる有効性が確認されました。

午後開催のシンポジウムに先立ち、午前中にはワークショップとして当館友の会の展示解説ボランティアが通常実施しているハンズ・オンをシンポジウム参加者に体験してもらったほか、第1部では入門講座やホームカミングデーでのハンズ・オン、不定期で開催している小学校への出張授業などを紹介し、当館で積極的に実施しているハンズ・オンについて実体験を伴う形で館園学芸員・職員を中心とする51名の参加者に理解していただくことができました。また、こうした館園のジャンルを超えて実例を検討する機会は少なく、各館園にとって実りあるシンポジウムとなりました。

開催にあたっては、第1部で布谷知夫全日本博物館学会会長、第2部で若生謙二日本展示学会会長にコメントをいただくなど、両学会には共催団体として多大な協力を賜りました。



公開ワークショップの様子



シンポジウム会場の様子

### 図書室から

「図書室から」では、博物館併設の図書室に関することや図書についてご紹介します。  
今回は『図書の修理と取扱い』について取り上げます。

博物館図書室に排架されている資料の中には、傷んだ図書が見受けられます。高い利用頻度や経年劣化によるものもあれば、書架横溢による負荷など、損傷の原因は様々です。資料の壊れ具合や利用頻度に応じて、必要な場合は修理を行ないます。修理は利用に耐えうる最小限にとどめる事が望ましいとされ、再修理できるよう可逆性のある素材や方法を用います。

修理には様々な方法がありますが、博物館図書室では簡易修理を行なっています。例えばハードカバーの表紙が外れてしまった場合、①表紙と中身を分離し不要な部分を取り除く ②見返しを剥がす ③クータ(紙筒)を作り中身の背に貼る ④見返しに裏打ちキャラコを貼ってハネを作り、中身のノドに貼る ⑤中身と表紙を貼り付ける ⑥ハネを表紙に貼り付ける…といった工程があり、糊をその都度乾燥させなければならぬため簡易修理とはいえ時間を要します。

図書室には貴重な資料が数多く所蔵されています。永く良好な状態で利用できるよう、丁寧なお取扱いをお願いいたします。特に複写の際は、強い力で複写機に押しつけると中割れや頁・表紙外れを起こす可能性があるのご注意ください。また、破損している図書を発見した場合は職員へお知らせください。

明大WebOPACでの検索時、「状態」の欄に「館内修理中」と表示された資料は、損傷の具合によって利用可能な場合があります。お気軽にお問い合わせください。

#### 参考文献

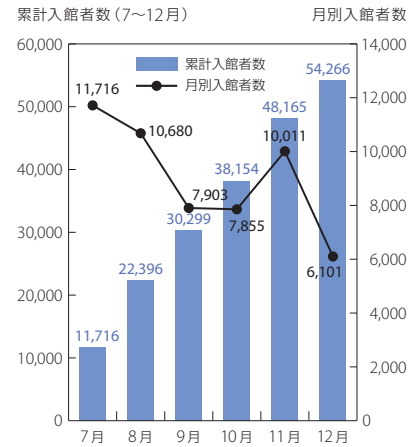
「防ぐ技術・治す技術：紙資料保存マニュアル」編集ワーキング・グループ編「防ぐ技術・治す技術：紙資料保存マニュアル」日本図書館協会、2005。

## 博物館入館者数の動き (2017年7月～12月:延べ人数)

2004年4月以降の  
総入場者数累計 **934,038**人

7月～12月	延べ人数
図書室利用者数	2,947
教室等利用者数	1,412

特別展示室来場者内訳		開催日数	来場者数
7/4～8/20	進化する不可能立体錯視 ～真実がわかって逃れられない不条理の世界～	40日間	9,255
9/6～10/10	十手と錦絵 描かれた捕者の世界	35日間	3,725
10/19～12/17	特別展 鳥取の工芸文化	60日間	2,137



## 団体見学の記録 2017年7月～12月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

**【一般】** 日本不動産管理株式会社 (12名) / NPO法人 富士見市民大学 (12名) / クラブツーリズム「東京の新発見旅へ 千代田区編」(190名) / 荒川健康クラブ (16名) / 追われた人々から見た日本史勉強会 (10名) / 東京都歴史教育研究会 (30名) / 株式会社ジェイアール総研エージェンツ (35名) / 一般社団法人日本セカンドライフ協会 (16名) / プラザ会 (21名) / 悠歩会 (10名) / 横浜市立高等学校 社会科研究会 (10名) / 曹洞宗教誨師連合会 (30名) / 街歩きの人々 (34名) / 防衛省陸上幕僚監部 法務官 (14名) / 板橋グリーンカレッジOB会 (100名) / 史誠会 (8名) / 株式会社NHK文化センター光が丘・横浜・水戸教室 (15名) / 株式会社NHK文化センター光が丘・さいたま・川越教室 (17名) / 明治大学校友会三鷹地域支部 (20名) / 市ヶ谷商業高等学校クラス会 (10名) / 東久留米市民大学 (49名) / 千葉県立船橋東高等学校PTA (37名) / 埼玉県いきがい大学所沢校友会 (8名) / 化学技術研究会 (12名) / 群馬県立藤岡中央高等学校PTA (40名) / 本庄東高等学校熊谷支部保護者会 (55名) / ISEHARAおもてなし隊 (10名) / 茜会 (12名) / 歴史散策会 (13名) / 皇居一周 江戸城堀めぐり (23名) / ふれあいサロン八幡 (30名) / 千葉県立国府台高等学校PTA (70名) / 曹洞宗埼玉県第二宗務所保護司会 (16名) / 旅人企画 (150名) / 株式会社NHK文化センター現地講座「旬な旅 味な旅」(22名) / 松戸市立博物館友の会 (42名) / 生涯学習ボランティアセンター (52名) / 六実連合町会 (49名) / 紫紺40会 (8名) / クラブツーリズム株式会社エコースタッフ (30名) / 船橋市飛ノ台史跡公園博物館 (40名) / 明治大学千葉県東部地区父母会 (60名) / 炉端の会 (水曜班) (20名) / 駒台台コミュニティセンター活動推進協議会 (45名) / 我孫子市歩こう会 (8名) / 日本ウェルネススポーツ大学タイケン学園東京神田神保町校 (57名) / 江戸を歩く (10名) / 江東区砂町文化センター (28名) / 藤沢市老人福祉センター歴史散策サークル (10名) / 大泉学園歩こう会 (29名) / 船橋マスター学院 (25名) / TWO WAYクラブ (20名) / 足立歴史サークル (12名) / 市立市川考古博物館ボランティア (15名) / 江戸川区史話会 (17名) / 多摩地区歩こう会 (16名)

**【中学校】** かえつ有明中・高等学校 (23名) / 葛飾区立青戸中学校 歴史芸文部 (10名) / 明治学院中学校 (40名) / 足立区立第九中学校 (30名) / 千葉大学教育学部附属中学校 (34名) / 成蹊中学校 (40名) / 立教新座中学校 1年生 (41名) / 練馬区立貫井中学校 (6名) / 練馬区立光が丘第三中学校 (5名) / 中野区立第五中学校 (5名) / 江東区立深川第五中学校 (35名)

**【高等学校】** 文京学院大学女子高等学校 1・2年生 (43名) / 星野高等学校 2年生 (66名) / 福島県立磐城高等学校 史学部 (10名) / 福島県立磐城高等学校 図書委員会 (5名) / 昭和薬科大学附属高等学校 (22名) / 長野県上田高等学校 (45名) / 東京都立江北高等学校 1年生 (48名) / 長野県岡谷東高等学校 (45名) / 鳥取県立鳥取商業高等学校 2年生 (62名) / 長野県松本織ヶ崎高等学校 2年生 (45名) / 広島県立福山誠之館高等学校 2年生 (37名) / 長野県松本美須ヶ丘高等学校 2年生 (44名) / 埼玉県立川口高等学校 1年生 (84名) / 和洋九段女子高等学校 (48名) / 麴町学園女子高等学校 (7名) / 鳥取城北高等学校 2年生 (36名) / 茨城県下妻第二高等学校 1年生 (42名) / 埼玉県立小川高等学校 1年生 (36名) / 群馬県立高崎商業高等学校 1年生 (80名) / 下関市立下関南高等学校 (7名) / 群馬県立吉井高等学校 (3名) / 埼玉県立浦和第一女子高等学校 (9名) / 昭和第一高等学校 (8名)

**【大学・大学院・専門学校】** 慶應義塾大学 法科大学院 (12名) / 明治大学法学部 Law in Japan Program (20名) / 山梨学院大学法学部 実川ゼミ (10名) / 東洋大学文学部史学科 内藤ゼミ (24名) / 武蔵野音楽大学生涯学習授業 (24名) / 共立日本語学院 (45名)

## M2カタログ クリアファイル・マスキングテープ発売中

特別展「鳥取の工芸文化 一手仕事の近世、近代、そして現代」の開催を記念し、クリアファイル(和食器釉映し)とマスキングテープを新しく博物館のグッズとして発売しました。

クリアファイルは釉薬の色を和食器の形で切り抜き、マスキングテープは柄柄として伝統的な七宝花菱唐草の柄を用いています。

展示をご覧いただいた後は、是非ミュージアムショップにもお立ち寄りください。お待ちしております。

ミュージアムショップ開店日 月～土10:00～16:30  
日曜・祝日・大学が定める休日、夏休期間(8/1～9/19)中の土曜は休業



マスキングテープ: 280円



クリアファイル: 120円

# 博物館友の会ボランティア募集

2018年度に創設30周年を迎える明治大学博物館友の会は、現在100余名の方が各種ボランティア活動に参加されており、活動を通していろいろな方への出会いと自己研鑽に励んでおります。現在下記のボランティア活動に参加される方を募集しています。

## ■ 博物館図書室受付ボランティアと書棚整理・配架ボランティア .....

図書室には主に発掘調査の報告書、考古・刑事・商品部門に関する一般図書、全国博物館の図録等があり、学内外の方に広くご利用いただいています。

- ・図書室受付ボランティア：博物館図書室利用者の入退室の受付を行います。
- ・図書室書棚整理・配架ボランティア：書棚の整理と新たな蔵書の配架（排架）を行います。

活動日は、月～土曜日の午前担当は9時50分～13時まで、午後担当は13時～16時30分の二交代制（午前・午後両方参加も可）月に1日（半日2回）程度の参加になります。参加は希望をとり、都合の良い日に参加していただいています。募集は常時受け付けています。

## ■ 展示解説ボランティア .....

明治大学博物館の商品・刑事・考古3部門の研修を受け、展示解説を希望される来館者に解説を行います。解説日は3人～4人でチームを作り活動します。

解説実施日は毎週火・木・金曜日の10時～16時30分です。

担当日数は毎月2日程度でローテーション担当者に希望日を連絡して調整後、決定します。

応募者は下記友の会連絡先までお問い合わせください。

2018年度の募集は5月23日まで受付。

なお、すべてボランティアに参加される方は博物館友の会の会員になっていただきます。友の会会員は年6～8回開催されます友の会主催の講演会参加費無料、明治大学図書館書籍の閲覧等の会員特典があります。

### 明治大学博物館友の会 連絡先

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館気付 博物館友の会  
メールアドレス：[meihakutomonokai@yahoo.co.jp](mailto:meihakutomonokai@yahoo.co.jp)

※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。連絡は必ず「ハガキ」または「Eメール」でお願いします。

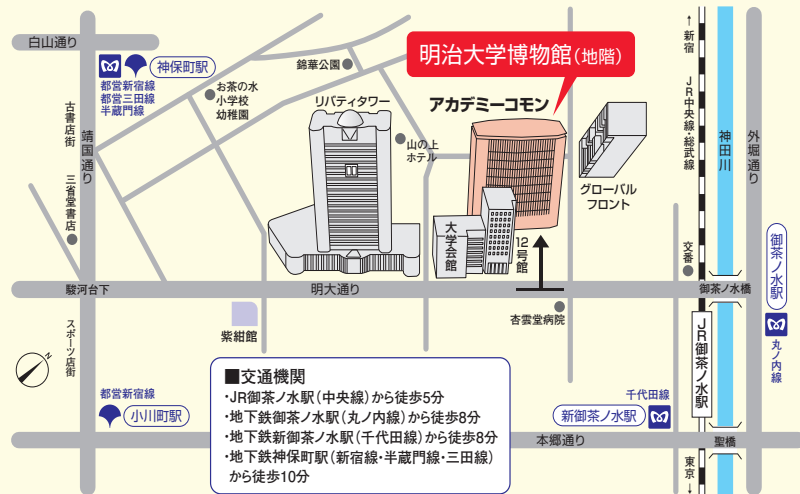
### 博物館案内

#### 展示室ご利用案内

- ◆開室時間  
10:00～17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日  
夏季休業日(8/10～8/16)  
冬季休業日(12/26～1/7)  
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料  
常設展無料。  
特別展は有料の場合があります。

#### 図書室ご利用案内

- ◆開室時間  
月～土 10:00～16:30
- ◆閉室日  
日曜・祝日・大学が定める休日  
夏休期間(8/1～9/19)中の土曜日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



### 編集後記

平成30年に博物館友の会も創設30周年を迎え、このミュージアムアイズ70号を飾ることになりました。これから更に博物館友の会と連携を深めて皆様に喜ばれるような活動を続けていきたいと思っております。発行するにあたりまして、ご協力・ご支援頂いた皆様に深く感謝いたします。今後ともよろしくお願い申し上げます。